

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法が大きく失われてしまいました。このような時にすこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、紙面1枚程度の短い法話を連載いたします。 小松教務所

どんなことを願って過ごしていますか？

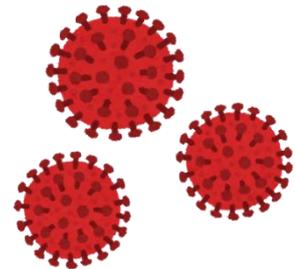
今、新型コロナウイルス感染症によって、世界中の子どもから大人までのありとあらゆる人々が生活様式を変化せざるを得ない状況が続いています。この、コロナ禍と呼ばれる状況から見えてきたこととは何だったのでしょうか？

新型コロナウイルス感染症そのものを恐れるだけではなく、自分が罹患した時の他者の目を恐れたり、あまり対策を取っていない人を見たらコロナをうつそうとしているのではないかと疑いを抱いたりしていませんか？

他者を疑いながら生活することによって他人とのつながりは分断され、思いやりの心も薄らいでしまっていないのでしょうか。もちろん、医療従事者の方々をはじめ、予防対策を講じてくださっているの方々に対して心を痛めている方も多いと思います。しかしながら一方では自粛警察という言葉も聞かれるようになりました。「自分は正しい。自分と違う意見は間違っている。」という思考のもと、他者性（思いやり）を見失っているすがたも露見したのではないのでしょうか。



これは浄土を願って生きることを忘れてしまった人間のすがたではないか、と感じます。共なる時代・環境を生きているにもかかわらず、「鬼は外、福は内」と、自分さえ良ければよいという心で、都合の悪いことは排除しようとするすがたです。



『鬼滅の刃』という漫画をご存知でしょうか。大正時代の日本を舞台に鬼を退治する物語ですが、主人公は敵である鬼の悲しみにも寄り添おうとします。家族を殺めた憎い敵であるはずの鬼に、主人公はなぜ寄り添おうとするのか。私は主人公に、私たち人間が見失いつつある「共に生きたい」というすがたを感じました。



『鬼滅の刃』主人公
竈門炭治郎

© 吾峠呼世晴/集英社・ア
ニプレックス・ufotable



仏光寺派の親鸞聖人伝絵（御絵伝）の六角堂参籠の段には、様々な人たちとともにある親鸞聖人のすがたが描かれています。そこには、当時、厳しい差別にさらされていた立場の人も描かれています。その情景と今の状況とを重ねることはできないかもしれませんが、あらゆる人たちとともに生きておられた親鸞聖人と比べて、現在の私たちは、あまりにも世間体や常識に重きを置きすぎてはいないでしょうか。

最近、浄土という言葉が語られることが少なくなり、代わりに聞く機会が多くなったのは天国という言葉です。死んでから行く場所というイメージが強いからではないかと思います。

浄土というのは阿弥陀仏の国土ということを表わしますが、浄土とは、権力も付度もなくお互いを尊重し念じ合う世界であると同時に、浄土という国土に込めた願いを伝えるという阿弥陀仏のはたらきでもあるのです。



そして、阿弥陀仏からの「自らを尊重し、他者とも尊重し合って生きて欲しい」という願いを、私たちは南無阿弥陀仏と頂いているのです。阿弥陀仏の願いは、私たち一人ひとりが心底に抱えている願いに似ていませんか。

あなたは、どんな世界を生きていますか？

本当は、どんな世界を生きていきたいですか？

あなたは今から、何を願って生きていきますか？

小松教区 遠慶寺 加藤雅輝